(3) 自治の精神を育む「人」の和

◆ 人材を生み出してきた郷土の歴史

○ ポスト工業社会の21世紀は、情報や知恵などのソフトパワーが発展の原資となる知識社会であり、情報化社会はそこに至る前段階であると言われています。

○ つまり、発展の資源はこれまでのように土地などの有形のものではなく、「人」が中心となります。これは、知恵や知識、工夫、技術などが今後の生活の質を向上させる起点であることに加え、人口減少社会においては、一人ひとりの価値を高め、その能力を最大限に発揮することが不可欠であることとも関連します。

○ このように、知識社会の進展や人口減少社会の到来に伴う労働力人口の減少、団塊世代の大量定年退職（2007年問題）などを考え合わせると、今後はいかに高度な人材を育み、あるいは引き寄せるかが地域の命運を左右すると言えます。

○ 上越市は、生活・産業基盤を安定させ、時代の変化に対応して発展を維持するため、明治より以前の時代から官民を問わず伝統的に教育に力を注いできた歴史があります。こうした「学都」としての側面は、日本最初の教員養成のための新構想大学である上越教育大学が立地する現在まで息づいています。

○ 上越市には、切手、ポスト、全国同一郵便料金などの近代郵便制度を構築し、国の基盤づくりに関わった「郵便の父・前島密」をはじめ、信越鉄道の敷設などを計画し、明治期の地域の発展に尽くした「地域開発者・室孝次郎」など、国の政治・経済・文化・産業の発展に優れた業績を残し、地域の発展を担った人々を生み出してきた土壌があります。古くから人材の重要性を認識し、生み育ててきた歴史を有していることは、今後の地域の発展においても変わらぬ強みです。

「郵便の父」前島密

◆ 成熟化社会[10]における“上越市ならではの暮らし”の確立

○ 現代社会は、ライフスタイルやライフコースの多様化や選択の自由が進み、成熟化社会に突入したと言われます。これは、自然環境や地域の歴史など、お金に代えることのできない価値を大切にしたいという気持ちや、社会との関わりや接点を持ちたいとする社会参加ニーズが高まり、多様な価値観を持つ人々が交流やネットワークを広げて、平等な立場同士でつながる社会の訪れを意味しています。

○ こうした時代において高齢社会[12]を迎えることは、むしろまちづくりの好機ととらえることができます。

○ 高齢化が進むことは、「大人社会」の訪れであるととらえることもできます。身の回りの身近なことに限らず、社会の様々な物事についても分別ある判断ができ、冷静な対応ができる、心の面で成熟した社会の訪れです。

○　つまり、「大人社会」とは、関心や趣味の幅を広げ、社会に多く関わる機会をつくり、自分を高める暮らしを希望する人が多く暮らす、本当の意味での生涯学習社会でもあります。

○　成熟化社会は、そうした心が豊かに成長した人たちを大切にする社会であると同時に、そうした人々が地域社会のあらゆるところで活躍する社会でもあります。

○　こうした人々の暮らしぶりは、この地で暮らしていくときのライフスタイルやライフコース、つまり“上越市ならではの暮らし”の見本にもなります。誰にでも必ず訪れる高齢期の暮らしが理想的なものであるなら、上越市で住み続ける人はそのまま住み続けたいと願い、市外に住む人にとっては“住みやすいまち”、“戻りたいまち”との印象を与える一つの物差しになるはずだからです。

○　また、いきいきとした大人の存在は、将来に希望を持ったいきいきとした子どもをつくるためにも重要な要件となります。

○　このように考えると、高齢者をはじめとして心の豊かさを備えた市民一人ひとりの暮らしを大切にするまちは、ひいてはそれ以外の年代層を惹きつけるまちにもつながります。上越市は、成熟化社会をこのようにとらえ、活力があふれるだけでなく、穏やかで品格あるまちの性格を備えていきたいと思います。

◆　ひとが支えるこれからの新しいまちづくり

○　上越市で暮らすことが、そこに住む人の人生に豊かさを与えるものであるためには、“上越市ならではの暮らし”を阻害する要因にも対処しなくてはなりません。

○　グローバル化が進み、「アジアの時代」の到来を受けて上越市が“開かれたまち”を目指そうとするとき、地域に利益がもたらされる反面、犯罪や環境汚染などの増加につながる側面も懸念されます。また、人々の交流を活発かつ容易にするネットワーク化社会の到来により、“匿名社会”と言われるように顔が見えにくくなることで生じる問題も多くなってきます。こうした事態をいち早く予見し、対策を講じることは、“上越市ならではの暮らし”の実現にとっても不可欠となります。

○　ただし、このような課題は、行政だけでなく地域社会全体の協力なくして解決することは困難です。行政は自らの役割に専念しながら、身近な問題に対応する近隣の地域コミュニティの力が発揮されるような仕組みづくりが必要です。

○　雪に閉ざされ生活の不便を強いられる冬や、時として発生する自然災害に対しても、地域の先人たちは知恵と人々の協力によってそれを乗り越え、忍耐強い人柄と表現される地域性・市民性を培ってきました。こうした連帯と協調の精神は、水路を共同で守るという水稲文化が根底にあるとも言われます。

○　上越市は、新しいまちとしてスタートしたことを契機に、分権型の都市運営を進めようとしています。これは、地方分権が本格的に推進される中、身近な地域のことを住民が中心となって考え、行動していくための新しい自治の仕組みを築こうとするものです。

○　まちの大小にかかわらず、まちづくりの本質は“身近なことは一人ひとりの協力によって解決し、そこでできないことを行政が担当する”という地域社会の原点に立つことにあります。地域に対する愛着をよりどころに、この地に住み続けたいと思うまちづくりを実現し、さらにそうした暮らしの営みの記憶や歴史を後世に受け継ぐ取組を、上越市は先進的に行うことのできる環境を有しています。